

2023年1月1日 説教「狭い門から」

マタイの福音書7章13～14節

新年おめでとうございます。2023年も主の恵みのうちに歩めますように。今朝は、今年の「姉ヶ崎キリスト教会の御言葉」を学んでいきます。この聖書箇所は、主イエスの山上の説教のなかにあります。M.ロイドジョーンズは山上の説教のなかであって、「あらゆる観点から見て、最も重要で中心的な聖句の一つである」と記しています。

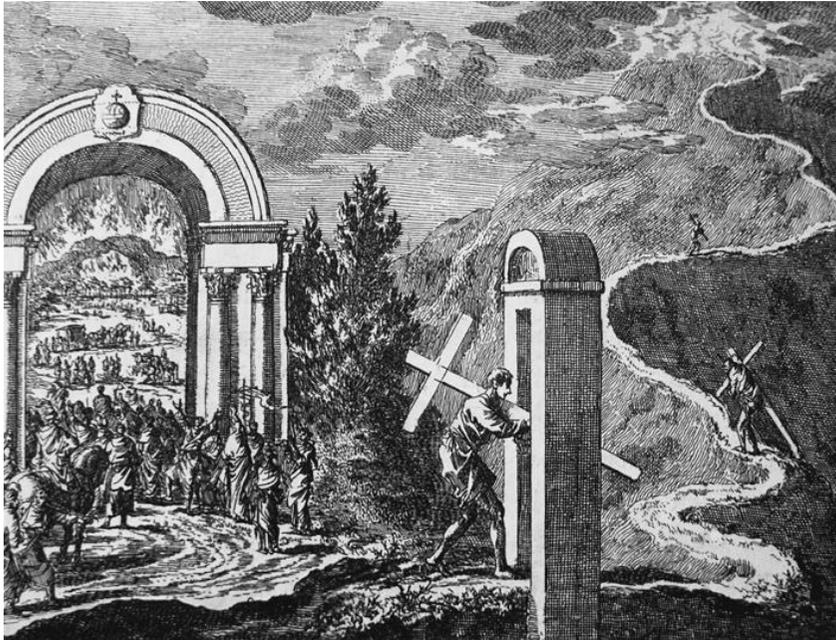
### 1. 狭い門と広い門 (13節)

①狭い門 (13) 「狭い門から入りなさい。」門というのは、別の世界への入り口であり区切りです。場合によっては、入るための条件があり、許可が必要となります。家の門を想起するならば、それは明らかでしょう。門があるのは、第三者が自由に入ることができないようにするためです。ですから、呼び鈴で名乗り上げるなどして、中の人々の許しがあって初めて、その門を開けて中に入ることができます。また、門というのはその場所の象徴である場合もあります。パリの凱旋門などは代表的な例でしょう。

主イエスのお言葉は、「狭い門から入りなさい」です。ここでは、入るのに許可が求められるかどうかはわかりません。門を前にして人は、何らかの判断をしましょう。その注意として、敢えて「狭い門」から入れと言われていたのです。その外見は派手ではなく、象徴的な門ともいえず、入って行くにはためられるかもしれないが、そこから入っていきなさいと言われていたのです。

②滅びに至る門 (13) 「滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。」狭い門とは対照的な門があります。それを主イエスは「滅びに至る門」と言われます。「滅び」とは何でしょうか。ヨハネの福音書3章16節にヒントがあります。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」。この御言葉には神が私達をどれほど愛してくださっているかが示されています。御自身のひとり子を私達に与えるほどだということです。つまり、ひとり子であるイエス・キリストは私達が救われるために、身代わりとして十字架にかかってくださったということです。この方を信じる者には、永遠のいのちが与えられるとあります。そこに「滅びることなく」という言葉が記されています。この文脈からいえば、滅びるというのは、キリストを信じることなく、永遠のいのちをいただくことができないことであるといえます。イエス・キリストを信じない道筋は、この13節を見るならば、その道は広いということです。滅びに至る門が広いというのは、この世的にいうならば、魅力的であり、賑わいがあるとういことです。

③入場者が多い (13) 「そして、そこから入っていく者が多いのです。」であればこそ、そちらの門から入っていく者は多いのです。なぜならば、こちらの門は魅力的で、そちらから入っていけば、幸せになれるからです。また、そちらに行く人が多いので、誘われてしまうこともありましょう。



## 2. いのちに至る門と道 (14 節)

- ①いのちに至る門 (14) 「いのちに至る門は小さく、」ここで「いのちに至る門」とあるのは、13 節で「狭い門」を言い換えていると理解できます。つまり、狭い門から入る者は(永遠の)いのち(ゾーウェー)に至ると述べられています。そして、ここでは「いのちに至る門は小さい」とあります。「狭い」と「小さい」とではどのような違いがあるかといえ、本質的には同じことです。要するに、そこから入るには、ためらいが生じるかもしれないほどに、狭かったり、小さかったりする門なのです。
- ②その道は狭く (14) 「その道は狭く、」そして、今度は門ではなく、「道」について語られています。13 節では門が狭かったのですが、ここでは道が狭いということです。合わせていえば、門が狭く、その後が続く道も狭いというわけです。門の外から中の道が見えるとするならば、門に続く道が狭いことがわかるわけです。その先を想像しても、道が広くなりそうにはありません。広い方が楽しく幸福になりそうだが、狭い方はずまらず、不幸になりそうだと想像します。しかし、それは正しくありませんが、そのように考えやすいことは確かでありましょう。
- ③少数派である狭い門から入る人 (14) 「それを見出す者はまれです。」13~14 節において、主イエスは狭い門からは入り、狭い道を進むようにと命じています。それは、そちらの門とそれに続く道こそが、いのちに至るからだとして教えています。しかし、そのように教えられたとしても、現実的な対応を迫られれば、広い門、広い道のほうを選びたくなるのが人の常でありましょう。「狭い門から入る」方が確かに正しそうですが、皆が広い門の方に行くのをみれば、そちらが正しいように見えてしまいます。この世的に考えても、そちらの方が間違いなさそうなので、多くの人が「広い門」「広い道」を選びとってしまうのです。結果として、狭い門から入る人は少数派ということになるのです。

《結論》狭い門というと、難関の試験のことを想像するかもしれませんが、また、アンドレ・ジッドの「狭き門」という小説のことを思い浮かべるかもしれませんが。

まず「狭き門から入りなさい。」というお言葉が語っていないことについて、述べましょう。それは、教会がこの言葉を受け、敷居を高くして人々が簡単には入れないようにするとしましょう。宣伝等は行わない。一般向けの集会や教室なども行わない、といった方向に考えを進めていくなれば、それは間違いだ

ということです。なぜなら、イエス・キリストは、世界の民への宣教を命じておられます。人々に教会に来ていただき、聖書を読んでいただき、祈る場面に身をおいていただくことなどを、主は決して否定しておられません。人々に福音を知っていただくための伝道活動は大切なことなのです。そのための努力は決して怠ってはならないのです。

それでは、「狭い門から入りなさい。」とは、どのようなことが教えられているのでしょうか。今朝はその一面を学びたいと思います。この御言葉は、それを聞いていた人たち、また聖書を読んでいる私達、一人一人に向けられたメッセージです。そして、これは入信の時だけに、問われることかといえ、そうではありません。クリスチャンが絶えず問われていることです。というのは、私達はこの日に至るまで、様々な教えや生き方や处世術などから影響を受けて歩んできました。そして、ある時聖書を読んでいると、それらと衝突することが出てきます。その時は、どうしたら良いでしょう。祈りましょう。そして、聖書が示すことと異なるのであれば、昔の生き方を捨てていく必要があるのです。しかし、誤解することもあります。「狭き門」という小説のアリサとジェロームは好き合っていました。しかしアリサは妹のジュリエットがジェロームを愛しているのを知って、恋愛から身を引きます。妹も姉の気持ちを知って別の結婚に進みます。アリサは悩み、地上の幸福を捨てて、狭き門を選んで修道院に入ります。自己犠牲を取ることが、神の喜ばれる道だとする事はある面では良いとして、神の御心を知るには、信仰の先達に相談し、客観的な状況を正しく把握することも必要です。何を取るべきかは祈りつつ、導きをえたいものです。

さて、「狭い門から入りなさい」ということを実行していくために、その根本的生き方を確認しておきましょう。それはキリストが「わたしは門です」(ヨハネ 10:9)と言われたことに関係します。「狭い門」という言葉自体にプレッシャーを受ける方がいるとするならば、言い換えましょう。狭い門から入るといことは、愛の源であり、慈しみ深い主イエス・キリストに従っていくということです。この方にすがって生き、この方の言われる御言葉を第一にしていくということです。教会の宣教についてもキリストの大宣教命令を確認しておきましょう。「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい」(マタイ 28:19)。ここにおいて、12 弟子達に命ぜられたことは、人々をキリストの弟子とすることでした。弟子というのは、学ぶ人です。キリストを学ぶ人です。クリスチャンは広く教養も身につけたいです。実際的な知識も必要です。技術も学ばなければなりません。趣味だって益があるでしょう。しかし、キリストから学ぶということがなければ、本末転倒です。この年、私達は「狭い門から入りなさい」と示されましたが、それはますますキリストから学ぶことを覚悟することです。キリストに従っていくことに心を向けていくことです。その道は、大いなる祝福と喜びと平安に至る道です。困難もあるかもしれませんが、キリストに従っていけば、間違いがありません。そのように決心したのがクリスチャンだとするならば、ますますもってきりとを知識においても、体験においてもキリストを知ることに心を注ぐ、えという「狭い道」を歩む一年とさせていただきます。